及ばず、翼賛政治から民主主義体制に転換した政界は空転を続けており社会一般また騒然とした時代であって、このときに均衡財政を堅持したことは極めて賢明なことであって、とても公債の発行できる状態ではなかったのである。

しかしながら戦後二十年経済は復興の段階から成長の段階を経て、今や調整の段階にさしかかり、国民一般の経済に対する信頼感も甦った今日において、公債発行の環境は整備されてきたといわねばならない。

世界各国をみるに戦後は公共投資や社会保障費等の増加により、各国とも国家財政の規模は膨張する趨勢にあって、多くの国が国民総生産の増加率を越えて財政支出が膨張しており、その歳入手段として公債を発行しているが、わが国は国民総生産の増加が二・一倍に対し歳出規模は二・〇倍で国民総生産の増加率よりも財政支出のそれが下廻っており、（別表3参照）歳入を税収等によってまかなう均衡予算を続けてきたのである。その結果わが国の公債発行残高は昭和三十七年で一二・八〇八億円で国民総生産に比べると六・七%であった。これを外国と対比してみると（一九六二年）

日本	六・七%
アメリカ	五四・八%
イギリス	一〇五・九%
フランス	二四・四%
イタリア	二四・四%

であって、わが国の公債発行高が如何に小さいかを示している。またわが国の比較的安定していた昭和五年においては公債発行高は国民所得の約半分、歳出の三・七倍であったのであって、現在公債発行の余地が十分あることが認められよう。

前述の通り公共投資の遅れているわが国においてはこの際狭義の均衡予算にとらわれることなく現在と将来を含めた広義の均衡予算を考えるべきで、建設的、生産的な公共投資のために目当公債を発行する環境は整備されてきた。

インフレの危惧なし

しかしながら公債発行の環境は整ったといっても、これがインフレを招来するという危惧は全ての人々から拭い去られたわけでなく、相当の人々によって慎重論が唱えられ、中期経済計画においても公債については「この計画期間中に発行することは適当でないと考えられる」と述べている。

慎重論の問題点は第一に予算編成上の問題であり、第二は公社債市場の問題である。

従来の予算編成には総花的な点があり、圧力団体、予算分奪りという芳しからぬ面もあって、公債発行によって財政が放漫化し、ひいてはインフレを招くという懸念があるが、ここにいう使途を建設的、生産的公共投資に限る目的公債であれば、この心配はないであろう。

また公社債市場が未育成である点は同感であるが、発行公債が僅少である現在では育成の仕様がないのであって、公債の発行に際して十分検討し、早急に市場の確立を図らねばならない。しかし、一般大衆は利殖の方法として証券に対する信頼を失なっているので、国家の保証する公債は案外に受けると思われ、タンス預金の引出しにも役立つのではあるまいか。この際利息の決定が重要であるが、可成り高い利率であることが必要で年七分ぐらいにはせねばならないと考える。

一方公債の消化が順調であれば民間資金が圧迫を受けるのではないかという懸念もあるが、目的公債の発行によって企業減税も行なわれるならば、企業は基盤を強化して信用力を増しやがて証券に対する信頼も回復するであろうから、ここに自ら政府、民間資金の調和がもたらされるものと信じている。

むすび

公債は戦争と縁が深い。明治以来富国強兵をスローガンとして版図を広めたがいまでは明治初年に立返って了った。全部とはいわないが公債がもたらした金と物とは跡形もなく消え失せたのである。それだけではなく幾百万の尊い人命を奪い、その家族を悲惨の底に落し、数えれば切りのない罪劫を重ねたのである。しかしここでいう「目的公債」がもたらすものは国家の資産として子々孫々に残り、経済の成長を助け繁栄を招くものであって、曽っての公債と根本的に意味が違う。

いま現に直面している経済危機を回避するとともに将来の繁栄のための礎石となるべき諸施設を建設するために、直ちに目的公債を発行することを提案する。

（神戸商工会議所会頭）

（別表3）　国民総生産（GNP）に対する財政規模の比較表

国別	年次	1955	1961	1961/1955 (%)
日本	GNP (億円)	81,706	172,030	210.5
	財政規模 (億円) (A)	10,182	20,635	202.7
	B/A (%)	12.4	12.0	
米国	GNP (億ドル)	3,975	5,182	130.4
	財政規模 (億ドル)	759.1	1,129.6	148.8
	%	18.1	20.8	
英国	GNP (百万ポンド)	19,163	27,057	141.2
	財政規模 (百万ポンド)	5,260	7,840	149.0
	%	27.5	29.0	
西ドイツ	GNP (億マルク)	1,804	3,264	180.9
	財政規模 (億マルク)	230.2	448.2	194.7
	%	12.8	13.7	
フランス	GNP (億フラン)	1,722	3,197	185.7
	財政規模 (億フラン)	326.1	667.4	204.7
	%	20.0	22.7	
イタリア	GNP (十億リラ)	13,807	22,022	159.5
	財政規模 (十億リラ)	2,811	4,341	154.4
	%	20.4	19.7	

星空は輝く

山地孝二

①　金子翁の御教訓

たつみ第二号に福渡氏の『金子翁の思いで』がのって居て偉大な翁を偲ばせて貰いましたが、それにつけて筆者にも翁が事に臨んで大胆でしかも万事に頗る細心であられた一端を知る、しかも、之は僕の終世の失敗談見たいなものがあるのです。

元来僕は十七才春、当時の神戸葺合樟脳専売局長の紹介にて、偶々其当時鈴木商店が住友から、故田宮嘉右ェ門氏工場長のまま譲受けた、ほやほやの神戸葺合樟脳精製所に勤務する事になったのですが、翁は監督がてら同工場構内の社宅を根城に毎日車で栄町の本店へ通って居られたので僕はここの玄関番を仰せつかり兼ねて、かたわら田宮工場長の事務の御手伝をして居りましたのです。其後幾年か経ち翁の肝入りにて東都へ遊学する事になり学校の休暇には、いつも、あちこちの支店出張所で実地見学をさせて戴いていましたが、或夏休暇に翁は『山地君、きみ今年は一つ徳島県へ行って見ないか実は最近同県下で山林を買ったのだが、両三日中に実測をする事になって居るから其一行に、くっついて行って見学して来てはどうじゃ、人間と云うものは、どんな事柄でも機会ある毎に経験しておいて、決して無駄になるものではない。きっといつの日にか、それが役に立つものだよ』との御話がありました。処が当時の僕にして見れば、山の測量などに興味は無かったので『今年は学校の宿題が多いので』と云う理由で御断りして其年は、福岡の店へ見学に行きました。処がです。何ぞ知らん翁の其時の御諭(さと)しを無視したむくいが何年か後に覿面自分の身に及ばんとわ、即ち其後大正十二年、かねて僕の一族が日露戦争時代から満州で経営して居た畜農産工業が拡張に迫られ井上準之助氏の斡旋にて故岩崎小弥太翁の内帑的出資を得て新たに資本金五百万円四分の一払込の三菱との合辯で事業を興して発足したのですが、其後いくばくも無く或事情の為め三菱からの常務に交代して当方から僕が当てられていましたので、其経緯を翁にお話して退社の儀を懇請しました処永年御厄介になった鈴木でしたが遂に希望を容認され、しかも一部的出資さえも得て新会社へ赴任する事になりました。処が其後数年ならずして、工場用地拡充の為め関東磨と接衝の結果山地約五万坪の払下げを受ける事となり、愈々土地の測量と云う段になり殊に山地の測量に全くの素人だった為め計画上少からず不利を蒙りました。僕にして幾分なりとも測量上に智識があったなら頗る有利に事を運び得たものでした。即ち過去を想起して今更ながら僕が、ほぞを噛んだのは申す迄もありません。或夏の休暇に翁が諭された『何事でも経験して置いて損にならない』と言われた一言が思い出されて後悔と云うよりは寧ろ恥ずかしいとさえ思いました。

流石に大をなした翁の様な方の日常の御心掛は吾人などとは違うと云う事を痛感すると共にそれ以来は折に触れ此の事を会社や店の若い人達に説き続けて来て居る次第です。

寒椿色の眼に泌む朝の凍て
旅立ちや夜明けの厨の寒蜆
ひそやかな正月にして石に笑む

本位田準一

② 柳田翁を偲ぶ

昔しの鈴木商店をして一時期に於て老舗を誇る三井三菱を摩するのは元より世界的にも大をなさしめたのは金子柳田両翁の名こんびがあったからだとは当時は勿論今日に至る迄広く世間に言い伝へられて居る事実ですが、僕が親しく柳田翁に接し得たのは明治三十七年頃、鈴木が上海に初めて海外支店を開設した時でした。それ迄は、ロンドンには日向利兵衛氏が基礎を造り、次で芳川筍之助氏、高畑氏に至って支店に昇格したのだと聴きました。

当時僕は田宮嘉右衛門氏に従い門司市外大里に建設中の大里精糖所に転勤して居ました。因に田宮氏は既に神戸葺合樟脳精製所の若き工場長として其非凡な工業経営の才を金子柳田両翁から高く評価されて居たのでいち早く新設の大里工場へ両翁の信条を担って赴任されたのでした。

そして上海支店へ先鋒として乗込まれたのは、僕の敬慕する森衆郎、香川潔氏等でしたが僕も、地理的条件もあって抜擢されて初陣に加わるを得ました。処が支店開設間も無く其状況視察の為め柳田翁は井原五兵衛氏を従えて出張され、およそ半ケ年程？御滞在になられましたので、その間図らずも翁の口蓋に接する機会に恵まれた次第です。

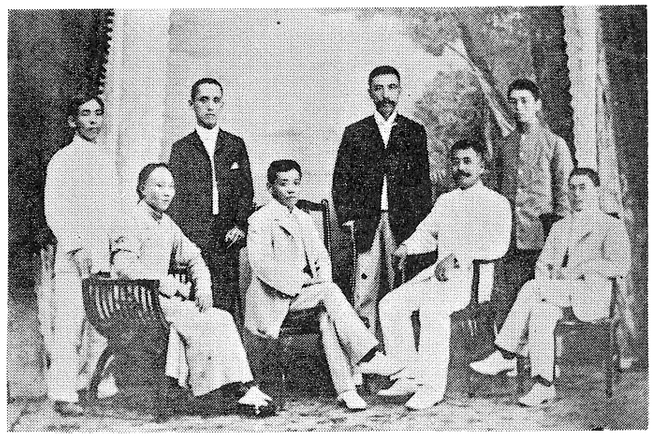
当時翁は故意に旅館への宿泊を見合せられ支店員と寝食を共にせられたのですが、翁の日常の御起居は頗る規則正しく、しかも店員の細い処に迄能く意を遣われ、厳重なる反面常に暖き愛情を以て接せられ短期間でしたが支那人職員、ボーイ、車夫に至る迄全く慈父の如く御慕いして居りました。或時の如き僕が毎日の銀行や商用で使い歩きするのを見て不便だろうと、それ迄に屢々懇請して実現出来なかった自転車（当時はまだ上海でさえ珍らしく、社宅の近所の外人の子供達は珍らしがって見て居た程でしたが）を早速買って戴いた事が記憶に残って居ります。

金子翁の活動的反面無情に迄見える御性格に対し常に小僧に至る迄店全体の者に対し暖く気を付けて居られた事は、店内の人心を常に鈴木に引付けて居られた原因と思います。

其後僕が海外へ出張する様になっても帰店の都度慈父の暖か味を以て慰労激励され此人此店の為めにはと常に心の緊張を覚えたものです。勿論私のみでなく店全体の者が此様な御扱いを受けたものです。

金子翁が後顧の憂なく大に世界的に活躍され得たのも女房役の柳田翁が陣営を微動だにさせず固く守って居られた事があづかって大に力あった事と今にして痛感するのです。

之は話が外れますが或時私が海外出張から帰来した時、店の受付にて（故松本氏と思う）咎められて居た時、偶々御家様が御供を従えて、はいって来られ、私を見て『山地何時帰って来た。早う御はいり』と云われて大に面目を施した時の事を思い浮べ、私が遊撃隊として常に、あちこちと出張やら赴任やらで彼是十余年もの間御目に懸って居ないにもかかわらず顔を記憶して居られて声をかけて下さったのであるが柳田翁が御家さんの感化に依るところ多く元々暖かい血の繋がりを引いて居られたのだと、ひそかに思った事でした。



向つて右より　吉見氏
山地孝二氏
井原五兵衛氏
森衆郎氏
柳田富士松氏
香川潔氏
阿洞氏
牟田氏

生涯要（かなめ）の人

（二代目）鈴木岩治郎さんの思出

柳田義一

鈴木岩治郎さんに就いては僕達の物心づく頃から享けた恩恵は泉の如く云い尽くせないものがある。

生涯徳望の方であっただけに、特に目立った逸話らしいものは格別覚えないが、御逝去の後、偶々側近におった友人から語られた一事は岩治郎さんの御性格を知るに最も相応しいものと思われる。夫れは今から三十年程前に遡った一夕、市内の知名人多数と、兵庫西常盤に宴を張られたことがある。

その中に岩治郎さんも羽織袴の和服姿で座を占められていたのであるが、その隣席に侍べられた、同じ年格好の紳士、今迄知らぬ同志でもあり初めは切掛けがなかったものか、あたりさわらずの、四方八方（よもやま）の話題も、宴が愈々酣（たけなわ）となって和気藹々、何時の間にか御両人膝を交えて酌みかわされて、大いにメートルをあげられた訳だが、彼の紳士は日頃の酒癖というか、良くある泣き上戸で、意気のあった岩治郎さんの羽織袴に遠慮会釈もあらばこそ、頭をすりつけられ、鼻水や涙をすりつけると云う大虎振り、岩治郎さんは寛容にも彼の為す儘、払い除けられもせず、むしろその稚気を愛せられたか、うまが合ったと云うのか、逆に介抱までしてその夜の宴が果てたと云う。

夫れからの数日後、この泣き虎氏は鈴木さんなることを誰かに教えられて自責に絶えずとあって、前夜の無礼を謝すべく、威儀を正して鈴木邸の門を叩かれた。無論岩治郎さんの方としても、謝すも謝さぬもないと、大いに喜ばれ之を奇縁として、終生交友を続けられて来た。この仁は、誰あろう現阪東調帯社長榎並正一さんの厳父充造氏（当時神戸商工会議所会頭）その人であった。

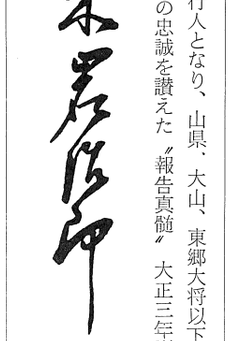
昭和十三年五月大阪朝日新聞連載「神戸人覚書欄」に語る人として、この榎並さんが左の文を寄せられている。

「高所からにらむ眼」と題して、鈴木岩治郎さんは、高い所から物を見るというが、そういった人物は中々見つかるものではない。その意味からいって、鈴木さんは神戸財界の一見識といってよかろう。大鈴木商店華やかな頃、よそ目で見ると、金子氏が一人で切り廻しているかに、見えたものだ。いつも恐ろしゅう応揚に構えていて、その実チャンと大局を見抜いていて、人の意表に出るところ等、堂にいったものだった…。

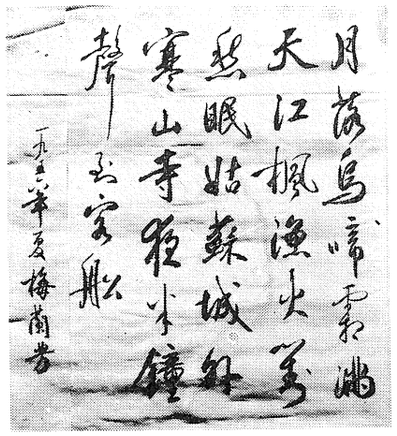
多趣味であられただけに所謂（いわゆる）、通人で岩治郎さんの穏れた足跡は大きいものがある。例えば芸術家達の後援には、橋本関雪画伯や、蔦谷竜岬画伯、林武氏等があり中国の名優梅蘭芳（めいらんふわん）を、大正八年五月日本に招聘、聚楽館の舞台を踏ませられたのも岩治郎さんの企劃、この頃から中国との演芸友交関係を夢見ておられたかも知れぬ。

折りに触れ今尚耳朶にのこる、僕達に対する、熱情の御叱声は、忘れ得ざる心の糧となっている。

四〇、二、一一



村野山人編集兼発行人となり、山県、大山、東郷大将以下、各界知名士の署名を集めて、乃木大将の忠誠を讃えた〝報告真髄〟大正三年刊に、鈴木商店主として収録されている岩治郎さんの筆跡



のびのびと、しかも優雅な線をもつた梅蘭芳の筆績（三十七年来日の時）